

『悉曇藏』所傳の四家の聲調について

平 田 眞 一 朗

はじめに

安然 (841 ~ 903?¹⁾) 撰『悉曇藏』(元慶四年・880 年序) の序、及び卷五「母字翻音」の中の「二、定異音」には、唐代の中國語の聲調に関する記述がある。(資料 a, b) そこでは、悉曇に對する漢字による音注に関連して、四種類の聲調體系が描寫されている。同書の記述などによれば、これらの聲調は大體八世紀から九世紀にかけて四人の人物(「表」「金」「正法師」「聰法師」)によって日本に傳えられた。同書の序に見える記述は次の通りである。

我國舊來二家、或無上去之輕重、或無平去之輕重。新來二家、或上去輕重稍近、或平上平去相涉。(資料 a)

「舊來二家」とは、同書において「表」「金」と略稱される二人の人物のことであり、承和 (834 ~ 847) 以前に中國大陸或いは朝鮮半島から渡來した外國人であろうと考えられている。このうち「表」については、八世紀の大陸からの渡來人袁晉卿 (716? ~ ?) のことではないかと考えられている²⁾。『續日本紀』の記載によれば³⁾、袁晉卿は天平七年 (735 年) に當時十八、九歳で、歸國する遣唐使に従って大陸から日本に渡來し、天平神護三年 (767 年) には「音博士」の職にあり、音韻に詳しかったとされる。空海 (774 ~ 835) の漢詩文集『遍照發揮性靈集』卷 4 所收の「爲藤眞川舉淨豐啓」には袁晉卿について、「父晉卿、遙慕聖風、遠辭本族、誦兩京之音韻、改三吳之訛響、口吐唐言、發揮嬰學之耳目⁴⁾。」とある。また「金」については「金禮信」という名前が傳えられているが生没年や経歴など詳しいことは不明である。ただ新羅人であつた可能性が高いと考えられている⁵⁾。

「新來二家」(「正法師」及び「聰法師」) とは、惟正 (813 ~ ?) と智聰 (821 ~ ?⁶⁾) という入唐の經驗を持つ二人の日本人僧侶のことであろうと考えられて

いる。惟正は圓仁（794～864）の從僧として承和五年（838年）に入唐し、承和十四年（847年）に歸國している。圓仁は840年から845年にかけて長安に滞在しており、おそらく惟正も同様にほぼ五年間にわたって長安に滞在したものと考えられる。智聰は圓珍（815～891）の從僧として仁壽三年（853年）に入唐している。しかし入唐後中途から圓珍一行とは別れており、その歸國は入唐から二十四年を経た元慶元年（877年）のことである。『悉曇藏』巻五には「元慶之初聰法師來。久住長安、委搜進士。亦遊南北、熟知風音。」とあり（資料b：10－11行目）、長安に長期滞在したことがあったと考えられる。智聰が歸國した元慶元年（877年）は『悉曇藏』成立（元慶四年・880）のわずか三年前である。

『悉曇藏』の序及び巻五に描寫されている四種類の聲調體系については、いずれも漢音の聲調を傳えたものと考えられる。漢音は唐代中期頃の北方の語音、中でも長安で行われた標準的な語音と関係が深いと考えられている。そして、奈良時代から平安時代にかけて漢音は「正音」として朝廷から特にその使用を奨励されていた⁷⁾。

漢音の聲調については、日本における字音傳承の流派の別により幾つかの異なる聲調體系が伝えられていたと考えられている。そしてその代表的なものとして「六聲家」と「八聲家」の二つの學派が知られているが、この両者はそれぞれ前述した「舊來二家」と「新來二家」の聲調が後世に傳承されたものであらうと考えられている⁸⁾。

以下において、『悉曇藏』が傳える四家の聲調の内容について、考察を加えていくことにする。本稿の本文末尾には參考資料として『悉曇藏』をはじめとする幾つかの文獻資料（資料a～d）を掲げてある。本文中でこれらの資料に言及する場合、「資料b：1～3行目」などと記して該當箇所を示すことがある。

1. 「表」の聲調と漢音の六聲體系

漢音資料に加えられた聲點や漢音の聲明の曲調などについての研究・分析の結果、漢音の聲調として伝えられた幾つかの聲調體系のうちその主流をなしたのは六聲體系であったこと、またその六聲體系の聲調の分類や調値がどのようなものであったかなどといったことが現在明らかにされている⁹⁾。『悉曇藏』

に記された「表」の聲調は、その聲調の分類から考えて、この六聲體系と大いに関連が有りそうである。今、六聲體系の聲調の分類と調値を、『悉曇藏』巻五に見られる「表」の聲調についての記述（資料b：4—5行目）と対照させて示せば〈表1〉のようになる¹⁰⁾。（これと同様の表は既に平田 2004：106 頁においても掲げてある。）

〈表1〉

	『廣韻』	調類	調値	『悉曇藏』の記述
平	全清・次清	平聲輕	下降	平聲直低有輕有重。 平中怒聲與重無別。
	次濁・全濁	平聲重	低平	
上	全清・次清 次濁	上聲（輕）	高平	上聲直昂有輕無重。
	全濁			上中重音與去不分。
去	全清・次清 次濁・全濁	去聲	上昇	去聲稍引無輕無重。
入	全清・次清 次濁	入聲輕	高平	入聲徑止無內無外。
	全濁	入聲重	低平	

有坂 1936 は、「表」の聲調體系は「陰平・陽平・上聲・去聲・入聲」からなる五聲體系であり、その聲調の分類から見て、官話方言の聲調體系の祖形を傳えたものであろうと論じた。沼本 1982：964-973 は平安時代中期の漢音資料に五聲體系によって聲點が加えられたものも存在することを指摘し、これは袁晉卿の傳えた聲調が傳承されたものだろうと論じた。また平山 1987：134-135 も「表」の入聲の分類について、輕重の區別を有さなかったと考えたほうが良いのではないかと論じている。

一方、金田一 1951：225 は「六聲家」の聲調について説明した後、「“表”式の四聲は、この六聲家の四聲と同一のものかと思われる。」と述べている。また森博達 1983：372 は沼本 1982 が示した五聲體系について、「本來六聲體系であったものが、和化によって五聲體系になったと解釋する餘地がないのか」と指摘している。

『悉曇藏』巻五に紹介されている空海の將來によるとされる悉曇は安然によって「表」の聲調（上聲と去聲）を用いて注記が加えられている（本稿第四節を参照）。また前に觸れたように、空海の漢詩文集である『遍照發揮性靈集』巻

4 所收の「爲藤眞川舉淨豐啓」からは、袁晉卿が空海に尊重された人物であったことがうかがえる（本稿注4を参照）。そして日本において「六聲家」は眞言宗に伝えられたという説があり¹¹⁾、これらの點から考えると「表」の聲調は本来六聲體系であったと考えるのが良いのではないと思われる。

さて、八世紀後半に多數の密教經典の翻譯に従事した不空（Amoghavajra 705～774）が、梵字母を漢字によって音譯する際の聲調に關する用字法上の特徴は、上に引いた「表」の聲調に見られる特徴と對應すると考えられる。（水谷 1968：175-178、馬淵 1984：428-433 を参照）不空は原則として、梵字母の短母音を漢字の上聲に、梵字母の長母音を漢字の去聲に、それぞれ對應させている。このことは、「表」の去聲が「去聲稍引」と描寫され持續時間が長いと認識されていた可能性があることと對應するであろう。また不空は、短母音の梵字母が有聲有氣の子音（gha, jha, dha, ḍha, bha。また氣音 ha も含む）を持つ場合、これらにあてた漢字については上聲ではなく去聲で讀むように指示している。このことは、『悉曇藏』卷五に「上中重音與去不分」とある通り、「表」の聲調において全濁音聲母を持つ上聲の字が去聲に轉じていたと考えられることと對應するであろう。これらのことから「表」の聲調が基いた中國語の原音は、不空が基いたところである八世紀の長安方言との間に、深い關係を有していたであろうと考えられる。

2. 『悉曇三密鈔』卷上末に見られる記載について

江戸時代の眞言宗の僧侶、淨嚴（1639～1702）による『悉曇三密鈔』の卷上末には吳音と漢音の初傳について次のような記述がある。

我日本國元傳吳漢二音。初金禮信來留對馬國傳於吳音舉國學之。因名曰對馬音。次表信公來筑博多傳於漢音。是曰唐音。承和之末正法師來。元慶之初聰法師來。此二法師俱說吳漢兩音¹²⁾。

この記述によれば、「金禮信」と「表信公」なる二人の人物がそれぞれ日本に吳音と漢音を初めてもたらしたのだという。この記事は上述した『悉曇藏』が伝える四家の聲調に關する記述に基いて、それに潤色を施したものである。本居宣長（1730～1801）はこれらの記述について『漢字三音考』（1784年序）「博

士ヲ置テ字音ヲ正サレシ事」の條において¹³⁾、「表」にしても「金」にしてもいずれも奈良時代から平安時代初めにかけて同時代の中國語の發音を傳えたものだろうと述べ、この二人の人物を漢音・吳音の初傳と結び付ける『悉曇三密鈔』の記載に疑問を投げかけた。

上に引いた『悉曇三密鈔』の記述によれば、「金」の傳えた漢字音は吳音系字音と何らかの關係があったかのごとくである。しかし本居宣長が指摘するように、この「金」も袁晉卿(716? ~?) とほぼ同時代の人物であろうと考えられ、當時としては新しい漢音を日本に傳えたものだろうと考えられる¹⁴⁾。吳音は本來その聲調について意識的な注意を伴わずに傳承されてきた。後に漢音がその聲調について細かい注意を伴って學習・傳承されるようになってから、その漢音の聲調に照らして吳音の聲調は體系的に把握されるようになったと考えられている¹⁵⁾。そして聲點加點資料など、吳音の聲調資料についての研究の結果、吳音の聲調は本來、入聲を別にすると低平調と上昇調の二種類であつたと考えられている¹⁶⁾。従つてその聲調體系は三聲體系(平・去・入)であつただろう。『悉曇藏』が傳える「金」の聲調は少なくとも六聲以上を區別していたと見られるため、やはり漢音の聲調を傳えたものと考えるのが良いだろう。また頼 1954: 293 が指摘するように、「金」の聲調について『悉曇藏』卷五が「聲勢低昂與表不殊」(資料b: 5—6行目)と述べていることから、「金」の傳えた聲調は、漢音を傳えたであろう「表」の聲調とあまり異ならなかったのであり、やはり漢音の聲調の一種であつたと考えられる。

なお、「金」(『悉曇三密鈔』はこれを「金禮信」と傳える)は新羅人であつた可能性が高いと考えられるため(本稿注5を参照)、「金」の傳えた漢字音も朝鮮の字音と何らかの關係があつた可能性がある。馬淵 1985 は上に引いた『悉曇三密鈔』の記事が「金禮信」の傳えた漢字音を「對馬音」と表現していることに注意し、これは「朝鮮古漢字音の一つ」ではないかと論じている。しかし新羅の字音も八世紀には既に唐代長安方言から強い影響を受けていたと考えられ¹⁷⁾、たとえ「金」の傳えた漢字音が新羅の「古漢字音」と何らかの關係があつたとしても、當時の日本人にとってそれはやはり漢音の一種として受け止められたのではないだろうか。

3. 「新來二家」と「八聲家」

『悉曇藏』卷五の記述（資料b：8行目また11行目）によれば、「新來二家」の聲調はいずれも八聲もしくはそれ以上を區別する聲調體系であつたと考えられる。『悉曇藏』の「新來二家」の聲調についての記述はやや難解であるため、ここではまず後世の「八聲家」の聲調について考え、そこから遡って「新來二家」の聲調について考察してみたい。「八聲家」の聲調の調値はその平聲と入聲に関しては前述（本稿第一節）した「六聲家」におけるそれらと同じであつたが（資料dを参照）、上聲と去聲に関してはやや複雑であつたようである¹⁸⁾。藤原宗忠（1062～1141）撰『作文大體』には上聲と去聲について「…上聲之重涉於去聲、々々之輕涉於上聲、通難分別之故也」（資料c：3—4行目）とあり、これは「八聲家」の聲調において上聲重の調値が去聲（重）と、去聲輕の調値が上聲（輕）と近く、それぞれ紛れ易かつたことを傳えていると考えられている¹⁹⁾。従つて「八聲家」においては上聲と去聲にも輕重を區別したが、實際のそれらの調値の違いは大變微妙であつた。了尊撰『悉曇輪略圖抄』（1287年頃）卷一に記された「八聲家」の聲調のうち、上聲と去聲の調値に關する部分を整理すると〈表2〉のようになる。資料dを参照。

〈表2〉

	輕	重
上	初後俱昂	初低後昂
去	初昂後偃	初低後偃

これによると、上聲と去聲の輕は共に「初」が「昂」、同じく重は共に「初」が「低」であり、上聲と去聲兩者の違いはただ、「後」が「昂」であるか「偃」であるかの點にのみ存することが分かる。そして「偃」とは一種の上昇調を表現したものと解されることから²⁰⁾、上聲輕が高平調と考えられるほかは、上聲重・去聲輕・去聲重のいずれもが上昇調と解釋されることになる。そしてこれら三者の違いはただその「初」から「後」への變化の型にのみ存したということになるだろう。『作文大體』は上聲重・去聲輕・去聲重について「上聲之重去聲輕重三聲非辨得、世俗所讀無有差別」（資料c：5行目）と述べ、それらの調値に關してやや詳しく記述している。その内容を整理すると〈表3〉のように

なる。(資料c:6—8行目)

〈表3〉

	上	下	注記
上聲重	輕平聲	上聲	其間直折不同去聲
去聲輕	短・平聲	長・去聲	尋常所讀去聲是也
去聲重	長・平聲	短・去聲	

上聲重を描寫するのに用いられている「輕平聲」とはここでは下降調ではなく、普通の平聲（低調）よりやや高い（半低?）音調を意味すると思われる²¹⁾。さて、この記述からすると、上聲重・去聲輕・去聲重はいずれも上昇調であった。上聲重はその發端高度が去聲輕や去聲重に比べてやや高く、その調値の上昇の角度も去聲輕や去聲重に比べると急であったのではないかと考えられる（「其間直折不同去聲」）。一方、去聲輕と去聲重はともに低い發端高度から比較的緩やかに上がる音調であったが、去聲輕は去聲重に比べるとその上昇調としての性格がよりはっきりしていた（「尋常所讀去聲是也」）。去聲重は音節末尾にわずかに上昇する程度だったかもしれない。

さて、『悉曇藏』卷五は「聰法師」の上聲と去聲についてつぎのように記述している。

上聲之重似正和上平輕之重。…（中略）…去之輕重似自上重。但以角引爲去聲也。音響之終妙有輕重、直止爲輕、稍昂爲重。…（資料b:12—14行目）

「正法師」の平輕之重について詳しい描寫がないため、この音調に似ていると記される「聰法師」の上聲重についてもはっきりしたことは分らない²²⁾。ただ「聰法師」の上聲輕は「平聲重+平聲輕」と解釋され、*113のごとき低上昇調であった可能性が考えられる²³⁾。前に考察した「八聲家」の聲調では、その上聲重・去聲輕・去聲重の調値は互いに近く、それらはいずれも上昇調であった。今、假に「聰法師」の上聲重が一種の上昇調であったと考えてみよう。その場合『悉曇藏』卷五に「去之輕重似自上重」とあることからその去聲も上昇調であったことになるだろう。「但以角引爲去聲也」とあるのはその音調がはじめ低調のままやや引つ張ることを意味したと解すれば²⁴⁾、『作文大體』が記す「八聲家」の聲調の去聲が低調（平聲）から始まっていることと符合し、

好都合である。「音響之終妙有輕重、直止爲輕、稍昂爲重」とは去聲輕がはつきりとした上昇調だったのに對し、去聲重はむしろ低調としての性格が際立っていて音節末尾に微かに上昇する程度だったことを意味すると解釋すれば、これもまた『作文大體』の記述と符合するのではないだろうか。「新來二家」と「八聲家」の聲調の調値が、細かい部分まで一致する可能性は低いかもしれないが、両者が調型のおおまかな特徴において類似点を有することは、十分考えられることであろう。

さて、梅祖麟 1970：102 は「舊來二家」の系統の聲調體系はより古い段階を反映しており「新來二家」の系統の聲調體系はより新しい段階を反映していると論じた。具體的には、「金」のような聲調體系（陰平・陽平・陰上・陽上・去・入）の去聲と入聲に陰陽調分裂が生じることにより「新來二家」の系統の八聲體系が出来上がったとするのである。しかしこれとは反對に、賴 1954：286・平山 1987：136—137 は、「聰法師」の聲調のように八聲體系でありながら陽上・陰去・陽去の調値が互いに近かったような聲調體系に、それら三調類の合併が生じ、「舊來二家」の系統の六聲體系（陰平・陽平・上・去・陰入・陽入）が出来上がったのだと論じている。つまり、「表」の聲調が基いたのは陰去・陽去・陽上の合併が比較的早く生じた方言であり、「聰法師」の聲調が基いた方言でもその合併が起こりつつあったが、九世紀後半においてなお、それは完了していなかった、と説明されることになる。

4. 四家の悉曇に対する聲調による注記

『悉曇藏』卷五「二、定異音」には安然が日本で學んだ四家（寶月・難陀・宗叡・空海）の悉曇が紹介されている²⁵⁾。このうち空海（774～835：その入唐は804～806年）將來の悉曇の他は、寶月・宗叡の悉曇が圓仁（794～864：その入唐は838～847年）の將來によるものであり、難陀の悉曇が圓珍（815～891：その入唐は853～858年）の將來によるものであると考えられている²⁶⁾。安然はこれら四家の悉曇の發音について、不空（Amoghavajra 705～774年）の梵語音譯における漢字の用字法などを模倣しながら、自ら漢字をもって音注を施そうと試みている²⁷⁾。

そしてそれらの音譯漢字には、「表」「金」「正法師」「聰法師」の四家の聲調を用いて、アクセントに關する注記が加えられている。ここでは、安然が四家の悉曇の母音字母を漢字によって表記する際に、四家の聲調による注記をどのように用いているかを分析することによって、四家の聲調の調値の長さについて考察を試みる。

短母音 a と長母音 ā 及び長母音 e と複母音 ai についての聲調の注記を表に整理すると〈表 4〉のようになる²⁸⁾。

〈表 4〉

	a 「阿」	ā 「阿」	e	ai 「愛」
寶月	上聲, 如正上聲之重。	引聲、如金上聲之重。發音均前。	「囁」上	引、聰音
難陀	上、如正上之重音。終如入。	上、如聰上之重。發音均前。	「囁」平、如正平之重	去、聰音
宗叡	上聲、如正上之重。	引聲、如金上之重。發音均前。	「警」上	引、正音
空海	上聲、表上之輕。	去聲、表去長呼。	「噎」去	去

八世紀後半の不空は、梵語の母音字母を漢字によって表記する際、梵語の短母音には漢字の上聲を對應させ、長母音には去聲を對應させている。「六聲家」に對應する「表」の聲調によって注記が加えられている空海の悉曇の場合、不空の用字法と同じように、短母音 a については上聲で讀むよう指示し、長母音 (及び複母音) ā, e, ai についてはいずれも去聲で讀むよう指示している。一方、「八聲家」に對應する「新來二家」の聲調、及び上聲に輕重の區別を有した「金」の聲調によって注記が加えられている寶月、難陀、宗叡の悉曇の場合、短母音 a についていずれも上聲 (ともに「正法師」の上聲重) で讀むよう指示し、複母音 ai に對していずれも去聲を用いている (音譯漢字「愛」は哈韻去声影母) 點は空海の悉曇の場合と同じであるが、長母音 ā, e については上聲もしくは平聲が用いられている。しかも長母音 ā の注記をよく見ると、そこに示された上聲は、短母音 a に對して注するのに用いられた「正法師」の上聲重ではなく、「金」の上聲重 (寶月・宗叡) もしくは「聰法師」の上聲重 (難陀) であることが分かる。(寶月・宗叡の悉曇で長母音 e に對して用いられている

上聲もおそらく ā の場合に同じく「金」の上聲重のことであろう。）そこで同じ上聲重でも、「金」及び「聰法師」の上聲重は、「正法師」の上聲重に比べて、調値の持続時間がやや長いと認識されていた可能性が考えられる。また、寶月・難陀・宗叡の悉曇において、長母音 ā, e に對して用いられている聲調と、複母音 ai に對して用いられている聲調とが異なることにも注意しなければならない。即ち、長母音 ā, e に對して、寶月・宗叡の悉曇の場合は「金」の上聲重、難陀の悉曇の場合は「聰法師」の上聲重と「正法師」の平聲重を用いているが、複母音 ai に對しては寶月・難陀の悉曇の場合は「聰法師」の去聲、宗叡の悉曇の場合は「正法師」の去聲を用いている。（空海の悉曇では ā, e, ai にはいずれも「表」の去聲が用いられている。）梵語の ā, e, ai はいずれも長母音であるが、その中でも複母音 ai は ā, e に比べると更に持続時間が長かったとされる²⁹⁾。そこで梵語におけるこれらの母音の長短の関係を $a < \bar{a}, e < ai$ のごとく三段階に分けて考えた場合、これらの母音字母の注記に用いられた聲調の持続時間の長短の関係も一應〈表5〉のように三段階に分けて考えられることになる。

〈表5〉

「正法師」の上聲重, 「表」の上聲輕

< 「金」「聰法師」の上聲重, 「正法師」の平聲重

< 「正法師」「聰法師」の去聲

「表」の去聲も空海の悉曇の注記に用いられているが、長母音（及び複母音）ā, e, ai の注記に等しく用いられているため、短母音の注記に用いられた「正法師」の上聲重と「表」の上聲輕よりは長かったかもしれないが、それ以上細かいことは分からない。また難陀の悉曇においては ā に「聰法師」の上聲重を用い、e には「正法師」の平聲重を用いて、ā, e 二つの長母音を區別しているが、この二つの長母音については少なくともその長短についてほとんど違いは無かったであろうから、聲調が使い分けられているのは持続時間の長短とは関係がなかったものと考えられよう³⁰⁾。

おわりに

本稿では部分的に言及するのみに終わったが、『悉曇藏』の記述に基いて、四家の聲調體系について調値推定を試みた先行研究も多い。頼 1968、馬淵 1984 : 335-343、尉遲治平 1986、遠藤 1988、平山 2002 などがある。

〈参考資料〉

本稿が『悉曇藏』の聲調記事の本文を決定するにあたって底本としたのは、『大正新脩大藏經』巻 84 所収 (NO.2702) の『悉曇藏』八巻である。これは寛政六年 (1794) の改訂板刊本に基づいている。他に、『大日本佛教全書・30・悉曇具書』(大日本佛教全書發行所・1922 年) 所収の影印本 (應徳二年 1085 年の寫本 : 該當箇所は 3 頁下及び 85 頁)、及び寛政元年 (1789) の刊本『校正悉曇藏』(八冊・國立國會圖書館所藏) を参照した。

なお、『悉曇藏』の記述に関連する文獻資料として、『作文大體』(資料 c)、『悉曇輪略圖抄』(資料 d) の記述もここに併せて掲げておく。

a). 『悉曇藏』序に見られる記述 (大正藏・巻 84 : 366c)

我國舊來二家³¹⁾、或無上去之輕重、或無平去之輕重。新來二家³²⁾、或上去輕重稍近、或平上平去相涉。

b). 『悉曇藏』巻五に見られる記述 (大正藏・巻 84 : 414b-c)

諸翻音中所注平上去入據檢古今難可以爲軌模。何者如陸法言切韻序云。古今聲調既自有別。諸家取舍亦復不同。吳楚則時傷輕淺。燕趙則多涉重濁。秦隴則去³³⁾聲爲入。梁益則平聲似去文。若爾風音難定。孰爲楷式。我日本國元³⁴⁾傳二音。表³⁵⁾則平聲直低、有輕有重。上聲直昂、有輕無重。去聲稍引、無輕無重。入聲徑止、無內無外。平中怒聲、與重無別。上中重音與去不分。金則聲勢低昂與表不殊。但以上聲之重稍似相合³⁶⁾平聲輕重、始重終輕呼之爲異。脣舌之間亦有差舛³⁷⁾。承和之末正法師來。初習洛陽、中聽大原、終學長安。聲勢太奇。四聲之中各有輕重。平有輕重、輕亦輕重。輕之重者、金怒聲也。上有輕重、輕似相合金聲平輕³⁸⁾上輕、始平終上呼之。重似金聲上重、不突³⁹⁾呼之。去有輕重、重長輕短。入有輕重、重低輕昂。元慶之初聰法師來。久住長安、委搜進

土。亦遊南北、熟知風音。四聲皆有輕重⁴⁰⁾著力。平入輕重同正和上。上聲之輕似正和上上聲之重。上聲之重似正和上平輕之重。平輕之重金怒聲也。但呼著力、爲今別也。去之輕重似自上重。但以角引爲去聲也。音響之終妙有輕重、直止爲輕、稍昂爲重。此中著力亦怒聲也。此兩法師共說吳音漢音。且如摩字那字泥字若字玄字迴字等類、吳似和音、漢如正音。漢土不能呼吳、吳土不能呼漢。又如母字不字等類、吳如開唇而更聚、漢如開唇而直散。但聰和上說云、前三家音巨唐無矣。以評曰。時世改變人俗轉換。以今呼昔、乖實違體。競欲指南、難辨走北。

c). 藤原宗忠 (1062 ~ 1141) 『作文大體』第八翻音の項⁴¹⁾

凡文字者有反音反音義與翻同、反音必有二字故、略頌云平上去入者依下字、輕重清濁者依上字、謂平聲輕者東、重者同、入聲輕者德、重者獨、皆依翻音、上字得其輕重清濁之義也、爰只舉平入聲者、上聲之重涉於去聲、々々之輕涉於上聲、通難分別之故也去聲輕涉上聲以未得其意矣、二字之音能難反之時、以悉曇可知之云云… (中略) …上聲之重去聲輕重三聲非辨得、世俗所讀無有差別、但略頌云上短下長去聲輕、上長下短去聲重、謂去聲重者、上平聲與長、下去聲而短、輕者其音不相殊、但上短下長、尋常所讀去聲是也、上聲重者、上輕平聲下是上聲、其間直折不同去聲云々

d). 了尊『悉曇輪略圖抄』卷一 (1287 年頃) (大正藏・卷 84 : 657b⁴²⁾)

右先明四聲輕重者。私頌云。平聲重、初後俱低。平聲輕⁴³⁾、初昂後低。上聲重、初低後昂。上聲輕、初後俱昂。去聲重、初低後偃。去聲輕、初昂後偃。入聲重、初後俱低。入聲輕、初後俱昂。但入、久津布千鬼、重通平、輕通上聲。四聲各輕重八聲。上重攝去聲之重、輕攝上聲之輕、除上重去輕六聲。上輕餘重是四聲。一音低昂名平上、低昂互前後成八、是故八聲各相通。

注

- 1) 安然是日本の天台宗の僧。安然の生涯については橋本 1918 を参照。
- 2) 袁晉卿については『日本古代氏族人名辭典』(吉川弘文館・1990): 125 頁、森公章 1996、平山 1987: 117-122 を参照。
- 3) 『續日本紀』卷 35 の寶龜九年 (778) 十二月庚寅 (18 日) の條などを参照。
- 4) 『三教指歸・性靈集』日本古典文學大系 71 (岩波書店・1965): 256-259 頁を参照。これは弘仁七年 (816) に、當時大學頭であつた藤原眞川が袁晉卿の九男である淨村宿禰淨豐を音博士に推舉する際に、空海が委囑されて書いたものと考えら

れている。

- 5) 『日本書紀』『續日本紀』において現れる「金」の姓を持つ人名のほとんどは新羅人のものであった。平山 1987: 122-123 を参照。
- 6) 智聰については橋本 1920 を参照。
- 7) 『悉曇藏』巻五には次のような記述がある。(資料 b: 14 - 16 行目)

此兩法師共説吳音漢音。且如摩字那字泥字若字玄字迴字等類、吳似和音、漢如正音。漢土不能呼吳、吳土不能呼漢。又如母字不字等類、吳如開唇而更聚、漢如開唇而直散。

ここで言われている「吳音」「漢音」とは、それぞれ中國南方方言と長安方言を指し、「和音」「正音」とは、それぞれ日本漢字音としての吳音と漢音を指すと考えられる。馬淵 1984: 343, 頼 1968: 62 頁注 2 を参照。

- 8) 馬淵 1984: 433 などを参照。
- 9) 漢音資料の聲点についての研究は沼本 1982: 947-1032 「漢音に於る聲調の諸問題」などを参照。天台宗所傳の漢音聲明の曲調についての分析は頼 1951 を参照。天台聲明の將來は圓仁 (794 ~ 864・その入唐は 838 ~ 847) まで遡るとされる。漢音の聲調の調値については金田一 1951 も参照。
- 10) 六聲體系の平聲經は下降調だが『悉曇藏』の「表」の聲調についての記述には「平聲直低」とあるため低降調と解釋するのが良いかもしれない。「平中怒聲」とは平聲の字のうち次濁音聲母を持つものを指す。有坂 1936 を参照。また六聲體系において全濁上聲字が去聲に轉じる比率については漢音資料によって相違がある。沼本 1982: 1035-1060 「漢音の複層性に就いて」を参照。
- 11) 例えば明覺 (1056 ~ ?) 撰『悉曇要訣』卷一には「寶月・宗叡意用八聲…皆云上聲重音。…弘法家用六聲、故此等字皆云去聲歟。」(大正藏・卷 84: 507b) とある。馬淵 1984: 429、小西 1948: 492-493、金田一 1951: 223-224 を参照。
- 12) 大正藏・卷 84: 731b。この記述については平田 2004 においても既に詳しく取り上げている。
- 13) 大野晉編『本居宣長全集・第五卷』(筑摩書房・1990): 396-397
- 14) 『三代實錄』元慶七年 (883 年) 六月十日の條には次のような記述がある。『新訂増補國史大系・日本三代實錄』(吉川弘文館・1973) 536 頁を参照。『三代實錄』は 901 年の成立。

從五位下行丹羽介清内宿禰雄行卒。雄行字清圖、河内國志紀郡人也、本姓凡河内忌寸、後賜清内宿禰姓。昔者唐人金禮信・袁晉卿二人歸化本朝云々。年七十三。昔文德天皇龍潛、御梨本院之時、雄行侍讀、百廿詠孝經。

佐伯 1982: 161-162 によれば、上に引いた記述の下線部分は、金禮信や袁晉卿によって教導された音道が清内宿禰雄行にまで傳流したことを述べているという。そして金禮信については、袁晉卿とともに、歸國する遣唐使に随つて天平七年 (735 年) に日本に渡來したものだろろうとしている。森公章 1996: 4-5 も同様の見解を示している。

- 15) 沼本 1982: 485-512、585-601 を参照。
- 16) 沼本 1982: 485-512 を参照。
- 17) 河野 1964: 309-311 を参照。平山 2002: 21 は、河野 1964 を引用して、中期朝

鮮語の文獻資料から知られる傳來の朝鮮漢字音の聲調の調値と、『悉曇藏』の四家の聲調について推定される調値との間に一部類似點が見られると指摘している。

- 18) 古文獻に残された記載から「六聲家」と「八聲家」の聲調の調値を推定した論考として、小西 1948：485-521・524-530 や、金田一 1951：221-232 「七、古代の諸文獻に見える四聲の音價に關する記述の考察」、馬淵 1984：428-437、尉遲治平 1986 などがある。
- 19) 朝山 1941 を参照。同様の内容を持つ記述は了尊『悉曇輪略圖抄』（1287 年頃）にも見えており、「四聲各輕重八聲。上重攝去聲之重、輕攝上聲之輕、除上重去輕六聲。」とある。資料 d：4 行目を参照。また『悉曇藏』序には「正法師」の聲調に關して「上去輕重稍近」とある。（資料 a：1－2 行目）
- 20) 小西 1948：490-493 は明覺撰『悉曇秘』（1090 年著）に見える「上重：字ノ初ハサガリ、終ハアガル。去重：字ノ初ハサガリ、後ハユガメルナリ。」との記述を引き、了尊『悉曇輪略圖抄』の記述（資料 d）について次のように述べる。

了尊は「アガル」を「昂」で、また「ユガメル」は「偃」で表す。「ユガメル」も廣義の「アガル」に屬するけれど、その移り方が直線的屈折でなく、緩い曲線的上昇なるものらしい。

金田一 1951：226-228 も「偃」とは上昇調を意味すると解釋している。馬淵 1984：437 も同様に解釋している。尉遲治平 1986：24-26 は「曲折調」を意味すると解釋している。

- 21) 馬淵 1984：435 を参照。小西 1948：528 は低調を意味すると解釋している。なお『作文大體』の記述が用いている「上」「下」という術語は、ここでは音節の前半部分及び後半部分のことを指すと考えられる。
- 22) 上に引いた『作文大體』の記述でも上聲重の描寫に「輕平聲」が用いられていたが何か關係があるのかもしれない。
- 23) 平山 2002：19～20 を参照。
- 24) 賴 1968：62 はこの「角引」について「宮・商・角・徵・羽の中ほどにあるから、中位の高さから始めることをいうと推定しておく。」と述べている。また、小西 1948：480-481 はこの「角引」には言及していないが、聲明家の用いる五音譜を紹介し、そこで「聲調をあらはすには、主に徵と角が用いられる。徵は高平調、角は低平調をさす。」と説明している。
- 25) 大正藏・卷 84：415。これら四家の悉曇については馬淵 1984：190-220 に詳しい。
- 26) 難陀の悉曇の將來についてははっきりしない點がある。橋本 1918：57-58 によれば、圓珍將來の悉曇は、算延・齊詮を経て、安然に傳えられた。圓珍は入唐後、853 年に福州において、インドから渡來した三藏より悉曇を受學している。しかし馬淵 1984：195-196 は、難陀とは長安に在住していた北天竺三藏難陀のことであり、その悉曇の將來は圓仁によるものとしている。
- 27) これら四家の悉曇の發音は、それぞれ當時のインドにおける方言による發音の違いを反映していたと考えられている。
- 28) a, ā に對する注記には全て「下准同此」と記されている。これは i, ī, u, ū につ

いても同様であるという意味。o, au に對する聲調の注記については e, ai の場合と同様。

- 29) 『悉曇藏』卷二には義淨撰『南海寄歸內法傳』(A.D.690～692)の字母表が紹介されているが、その一部を引用すると次の通りである。(大正藏・卷84:380a。但し水谷1968:170の指摘に従って修正を加えてある。)

…十二聲者謂是:ka 脚, kâ 迦(上短下長);ki 枳, kī 雞姜移反(上短下長);ku 矩, kū 俱(上短下長);ke 雞, kai 計(上短下長);ko 孤, kau 告(上短下長);
…

水谷1968:170はこの記述について次のように述べている。「…義淨の文における長短を指示する原注は“ai・au は長母音であり、e・o は短母音である”という意味のものではなくて、實は、e:ai の2音間の聴覺上の時間的差異を述べ、“e は ai より短い”と言っているにすぎないということである(o・au も同じ)。…」そして義淨のほか同じ七世紀の玄奘・地婆訶羅も梵語の母音について、短母音<長母音<複母音というように三段に長短の關係を考えていたであろうと指摘している。そしてこのことは八世紀以後の不空や慧琳にとっても同様だったとしている。

- 30) 尉遲治平1986:29-30もこれら梵語の母音字母に對する四家の聲調による注記に注意し、分析を加えている。尉遲氏は梵語のaにあてられた「正法師」の上聲重と「表」の上聲輕は短く、āとaiにあてられた「金」「聰法師」の上聲重、「表」「正法師」「聰法師」の去聲はいずれも長かつただろうと論じている。本稿では複母音aiはā, eより更に長かつたとする考えに基いたため尉遲氏とはやや異なる解釋になった。
- 31) 寛政元年刊本は「二家」の横に「表金」と注している。
- 32) 寛政元年刊本は「二家」の横に「惟正 智聰」と注している。
- 33) 底本は「平」とするが、『切韻』序文により「去」に改めた。
- 34) 『大日本佛教全書・30』所收影印本では「无」となっており横に小字で「元」と注する。
- 35) 『大日本佛教全書・30』所收影印本では「表」となっており横に小字で「表」と注する。
- 36) 底本、及び寛政元年刊本はここに句讀を入れ、「上聲ノ重ハ稍ク相合スルニ似ル」と訓讀するように指示している。本稿では馬淵和夫氏などの説に従い、ここには句讀を入れず、これに續く「平聲輕重」の後に句讀を入れる。馬淵1984:336を参照。
- 37) 底本は「升」に作るが寛政元年刊本に従い「舛」に改めた。
- 38) 底本、及び寛政元年刊本はここに句讀を入れ、「上二輕重アリ、輕ハ金ノ聲平ノ輕ヲ相合スルニ似タリ」と訓讀するように指示している。本稿では馬淵1984:336などの説に従いここには句讀を入れず、これに續く「上輕」の後に句讀を入れる。
- 39) 『大日本佛教全書・30』所收影印本、及び寛政元年刊本は「突」を「𡗗」に作る。
- 40) 底本、及び寛政元年刊本はここに句讀を入れる。本稿ではこれに續く「著力」の後に句讀を入れる。馬淵1984:335を参照。

- 41) 小西 1948：524-526 に掲げられた東山御文庫乙本の本文を参照。
- 42) この記述については小西 1948：503、尉遲治平 1986：22、馬淵 1984：436-437 を参照。
- 43) この「輕」の字は大正藏の本文にはない。小西 1948：503、尉遲治平 1986：22 などに従い補った。

〈参照文献〉

- 有坂秀世 1936 「悉曇藏所傳の四聲について」、『國語音韻史の研究（増補新版）』（東京：三省堂・1957）：591-599 頁。
- 朝山信彌 1941 「古代漢音における四聲の輕重について」、『朝山信彌國語學論集』大阪：和泉書院・1992：95-108 頁
- 遠藤光曉 1988 『『悉曇藏』の中國語聲調』、遠藤光曉著『中國音韻學論集』（東京：白帝社・2001）：162-177 頁。
- 橋本進吉 1918 「安然和尚事蹟考」、『橋本進吉博士著作集・第十二冊 傳記・典籍研究』（東京：岩波書店・1972）：39-108 頁。
- 橋本進吉 1920 「入唐僧智聰と悉曇藏の聰法師」、『橋本進吉博士著作集・第十二冊 傳記・典籍研究』（東京：岩波書店・1972）：123-133 頁。
- 平田眞一郎 2004 『『悉曇藏』所傳の「金」の聲調について』、『中國語學研究 開篇 vol.23』（東京：好文出版・2004）：104—109 頁。
- 金田一春彦 1951 「日本四聲古義」、金田一春彦著『日本語音韻學調史の研究』（東京：吉川弘文館・2001）：166-241 頁。
- 小西甚一 1948 『文鏡秘府論考・研究篇上』。京都：大八州出版社。
- 河野六郎 1964 「朝鮮漢字音の研究」、『河野六郎著作集・第二卷』（東京：平凡社・1979）：295-512 頁。
- 馬淵和夫 1984 『増訂 日本韻學史の研究・I』。京都：臨川書店。
- 馬淵和夫 1985 「對馬音について」、『國語學』141：18-27 頁。
- 水谷眞成 1968 「梵語音を表わす漢字における聲調の機能～聲調史研究の一資料～」、『水谷眞成著『中國語史研究』（東京：三省堂・1994）：152-180 頁。
- 森博達 1983 「日本漢音について」、『森博達著『古代の音韻と日本書紀の成立』（東京：大修館書店・1991）：359-375 頁。
- 森公章 1996 「袁晉卿の生涯～奈良時代、在日外國人の一例として～」、『日本歴史』1996 年 9 月號（第 580 號）：1-15 頁。
- 沼本克明 1982 『平安鎌倉時代に於る日本漢字音に就いての研究』。東京：武蔵野書院。
- 賴惟勤 1951 「漢音の聲明とその聲調」、『賴惟勤著作集 I 中國音韻論集』（東京：汲古書院・1989）：383-439 頁。
- 賴惟勤 1954 「丹陽方言と日本漢字音との聲調について」、『賴惟勤著作集 I 中國音韻論集』（東京：汲古書院・1989）：279-295 頁。
- 賴惟勤 1968 「吳音・漢音の聲調」、『中國文化叢書 9・日本漢學』（東京：大修館書店）：58-66 頁。

- 佐伯有清 1982 『新撰姓氏錄の研究・考證篇第四』。東京：吉川弘文館。
- 平山久雄 1987 「日僧安然《悉曇藏》里关于唐代声调的记载」，『平山久雄语言学论文集』（北京：商务印书馆・2005）：113-141 页。
- 平山久雄 2002 「安然《悉曇藏》里关于唐代声调的记载～调值问题」，『纪念王力先生百年诞辰学术论文集』（北京：商务印书馆・2002）：16-22 页。
- 尉遲治平 1986 「日本悉曇家所傳古漢語調值」，『語言研究』1986 年第 2 期：17-35 頁。
- 梅祖麟 1970 Tones and Prosody in Middle Chinese and the Origin of the Rising Tone. Harvard Journal of Asiatic Studies, 30 : 86-110.